

第 12 回 IAEG コングレス参加報告 第 14 回海外応用地質学調査団の報告

国際委員会

1. はじめに

去る 9 月 15 日から 19 日に第 12 回 IAEG コングレスが、前回 2010 年のニュージーランドに続いてイタリアのトリノにおいて開催された。 kongress 前日の 9 月 14 日には役員と各国代表による Council meeting(総会)が行われ、千木良前会長が Japan National Group の代表として、国際委員会から茶石が出席した。

今回の kongress には、日本応用地質学会から第 14 回海外調査団が参加し、IAEG 日本支部の行事としてマルパッセダム及びバイオントダムの現地調査も実施し多くの会員等が参加した。

今回の kongress は IAEG 設立 50 周年記念の会であり、約 50 年前に起きた著名なふたつのダムの事故現場を訪れるという意義のある調査となった。これらの調査資料については、後日調査団員により本学会誌に報告されるほか、写真等が公開される予定になっている。

2. IAEG コングレス

(1)トリノと会場

kongress は、イタリア北西部に位置する古都トリノ(人口約 87 万人)で開催された。トリノは 8 年前に冬季オリンピックが行われたところであるが、国際空港はあるものの一般には日本からミラノに入り、バスまたは鉄道で約 1 時間半から 2 時間かけて移動する。トリノは古い石造りの町並みが続く落ち着いた街で、トリノ中央駅からローマ通りを経て王宮の周辺が観光の代表であり、余った時間を使って手軽に訪れることができた。

会場はトリノ中心から地下鉄で 15 分ほどのところに位置する元フィアット社の自動車工場であった Lingotto Conference Centre で開催され、アクセスは便利であった。ただし、初日の 15 日夜には会場で Ice Breaker party があったが、運

転手の一週間の労働時間の調整とやらで、地下鉄が 10 時頃終わってバスに振り替えられており、それがわからない人はしかたなく雨の中を 40 分ほど歩いて帰ることになった。このようにイタリアの旅行では、運転手の連続運転時間制限や一日の時間制限などの規則があり戸惑うことがある。



路面電車が走るトリノの街の風景

(2)会議

会議参加者は約 1050 人で、地元イタリアが最も多く次いで中国が多かった。ただ、日本からは約 40 名で国別では 4 番目であり、参加者数では比較的目立った存在であったと言える。

kongress のテーマは、Engineering Geology for Society and Territory で内容としては地すべり等の災害に関するものが多かった。

論文の提出は 8 テーマに約 1800 件のアブストラクト提出があり、そのうち 1300 件の論文を受理し、口頭発表とポスターの割合は、だいたい 2 : 3 となった。論文集は印刷されなかったが、8,600 ページ以上に達するというのであった。

各セッションのテーマと発表者数の概要は以下の表に示すとおりで地すべりに関する発表が最も多く、八つの部屋に分かれて同時に進行した。日本からは口頭発表のほか多数のポスタープレゼンテーションがあった。

各セッションに先立ち、9月14日のオープニングでは代表である Giorgio Lollino 前イタリア会長の挨拶に続いて Carlos Delgado IAEG 会長等のスピーチがあった。その後、IAEG 役員等の9名とともに Hans Cloos Medal を受賞したフランスの Roger Cojean 氏の基調講演があり、長年編集責任者を果たしてきた Braian Hawkins 氏に Marcel Arnould madal が贈られた。

表-2 コングレス発表テーマ

テーマ	発表数
Keynote lecture	21
Climate change and engineering geology	105
Landslide processes	388
River basins, reservoir sedimentation and resources	129
Marine and coastal processes	43
Urban geology for major engineering projects	265
Applied geology for major engineering projects	195
Education, professional ethics and public recognition of engineering geology	54
Preservation of cultural heritage	103
計	1,303

プロシーディングや論文集はなく、代わりに Springer による CD が配布された。

会議のプログラムは簡易版が参加者に配られ、詳細は website を見る必要があった。印刷物による環境への負荷が七分の一で済んだとのことであったが、発表の詳細をあらかじめ調べる必要があり参加者には不評であった。また、セッションの単純な印刷ミスや最終日のポスターセッションの時間が混乱するなど、評判はあまりよくないようであった。

9月15日夕刻には Ice Breaker party、17日には

オプションでフィアット社のコレクションがそろった自動車博物館を見学したのちに、同館内において Social Dinner があった。主催者代表の Giorgio Lollino 氏によると、参加費 500 ユーロ(約 65,000 円)では費用とバランスせず種々工面したことが会議前日の総会で報告された。

今回のコンGRESSでは IAEG 設立 50 周年記念の本が配布された。体裁は非常に立派なものであるが、中身はこれまでの役員の写真ばかりで会員にはあまり関心がないと思われるものであった。

4. IAEG Council meeting (総会)

4.1 議事概要

会議前の 14 日に開催された総会の議事の概要は以下のとおりである。

- ・ 前回議事録(中国北京)
- ・ 会長報告(Carlos Delgado 氏)
- ・ 事務局長報告(Wu Faquan 氏)
- ・ 会計報告
- ・ 各地域副会長活動報告(6名)
- ・ IAEG Commission 報告 TOC から報告
- ・ コングレス 2014 報告
- ・ 編集局長(Martin G. Culshaw 氏)報告
- ・ 次回の第 13 回コンGRESS開催地
- ・ 2015 年と 2016 年の会議と次回総会開催地
- ・ 設立 50 周年記念



9月14日の IAEG 総会の様子

報告によると、会員数は約 3,800 人で、最も多いのはドイツ(ほとんどが会誌なしの会員)、中国(前年より約 100 名増加)、第 11 回コンGRESS開催地のニュージーランドとオーストラリア、イギリス(前年より約 70 名減少)の順になっている。最近ではアメリカやカナダが増加傾向である。ドイツの代表に聞いたところでは、国内学会の会員になると自動的に会誌なしの IAEG 会員になる仕組みであるとのことであった。

アジアでは最近シンガポールが急激に増えて 102 名(ほとんどが会誌なし)と人数では日本を抜いている。また、マレーシアからは活動が復活したことが報告されている。後述する 2015 年に総会が開催されるインドは 24 名と少ない。

4.2 第13回IAEG Congress (2018年)開催地

2018年の第13回IAEG Congress開催地には、候補がアメリカのロサンゼルスのみであり賛成多数で決定した。テーマとしては、地震・津波災害、斜面災害等をあげている。また、フィールドトリップとしてサンアンドレス断層やヨセミテ公園等を計画している。

4.3 Regional Congress

2015年9月26～27日に京都で開催されるアジアシンポジウム(アジア地域会議)の準備状況とアピールが千木良前会長からされ、同時にパンフレットを総会参加者全員に配った。このパンフレットはIAEG会場でも配布した。

また、2015年10月27日～29日にインドのニューデリーにおいて Engineering Geology in New Millenniumをテーマに開催される会議の日程等がインド代表よりアナウンスされた。

4.4 2015年の IAEG Council Meeting

上記の2015年10月にニューデリー(インド)で開催される国際会議をIAEG行事とすることが審議された後に、2015年9月に京都で開催す

るアジアシンポジウムのどちらに合わせて総会を開くか投票が行われ、ニューデリーに決定した。ちなみに、このインドの会議では登録料収入の5%をIAEGに還元すること、前日にハイデラバードで総会を開くことを提案していた。

なお、前回の北京で2015年の総会の開催地を提案していたブルガリアは2016年に変更したとのことであった。

4.5 役員選挙(2010—2014)

次期 IAEG 会長と各地区副会長の選挙が行われ、その結果は次のとおりとなった。投票者数は約 60 票であった。なお、事務局長、アフリカ・オーストララシア・南北アメリカの各副会長については立候補が 1 名で投票はなかった。

- ・ IAEG 会長

 - Prof. Scott Burns(USA)

- ・ アフリカ地域副会長

 - Louis van Rooy(南アフリカ)

- ・ アジア地域副会長

 - Yogendra Deva(インド)

- ・ オーストララシア地域副会長

 - Mark Eggers(オーストラリア)

- ・ ヨーロッパ地域副会長

 - 北地域 Prof. Rafiq Azzam(ドイツ)

 - 南地域 Giorgio Lollino (イタリア)

- ・ 北アメリカ地域副会長

 - Dr. Jeffery Keaton(USA)

- ・ 南アメリカ地域副会長

 - Mara Heloisa B. Oliveira Frasca(ブラジル)

- ・ IAEG 事務局長

 - Prof. Wu Faquan Wu(中国) 再選

- ・ 会計

 - Jean-Alain Fleurisson(フランス)

5. 第14回海外調査団による現地調査

コンgress中と後の9月16日と19日～20日にIAEG日本支部主催の巡検を行った。16日は1959年に破壊したフランスのマルパッセダム現場の調査をトリノから往復10時間ほどかけて行った。この現場には1993年に第3回海外応用地質学調査団に加わり訪れているが、それから約20年過ぎた現在でもほとんど当時と変わらない現場であった。マルパッセダムの事故は、ダム計画における基礎岩盤の調査の重要性を世界中に認識せしめ、当時建設中であった日本の黒部ダムの設計にも影響を与えたことが知られている。



マルパッセダム現場を調査する団員

19日～20日はトリノから世界遺産のドロミテの地形・地質調査を経て20日にバイオントダムの現地調査を行った。バイオントダムは1963年に貯水池左岸側の山体が巨大な地すべり(崩壊)を起こし貯水池が埋没し、下流に甚大な被害を与えたことで知られている。高さ262mのアーチダムは放棄されたが、堤体そのものは損傷がなく、現在は堤頂を歩行することができる。19日は悪天候で20日午前の現地調査が予定通りにできるかどうか団員の気をもませたが、20日朝に天候が回復し、調査の時間は十分ではなかったものの、この巨大な事故現場を目の当たりにすることができ

た。

冒頭に記述したように、これらの現場の写真等の調査の成果については学会誌やHPに公開予定である。



生々しく残るバイオントダム左岸の崩壊斜面



崩壊斜面を背景に第14回海外調査団のメンバー

以上、第12回IAEGコンgressと海外調査団の概要を報告した。

(茶石 貴夫)